

『ジョン万次郎漂流記』の主典拠

伊藤 眞一郎

『ジョン万次郎漂流記』は、「記録文学叢書」の第八巻として書き下ろされ、河出書房より、昭和十二年十一月に刊行された。

井伏は、その初版本の「序」において、人経歴、年代月日、地名、登場人名、すべて事実即したつもりだが、調査困難な外国人数名の性格には触れないことにした¹と言い、作品執筆に当っての史実尊重の方針を表明している。「記録文学」の名の通り、何らかの記録に依拠した作品であることが推察されるわけであるが、その依拠した記録類のいかなるものであるかという点に関しては、さらに作品本文中で、次の三書名が注記の形で明示されている。

- (1) 木村毅著『ゴールド・ラッシュ』(68頁)
- (2) 石井研堂著『中浜万次郎』(68頁)
- (3) 河村幽川著『カリホルニヤ開化秘史』(106頁)

右の(1)は、『ジョン万次郎漂流記』と同じ「記録文学叢書」中の一冊で、井伏自身、これに依拠したと明言しているわけではないのだが、注記によれば、ゴールド・ラッシュ時代の風潮に感染した万次郎を描くに際して、同書が参考されたことは確かである。

ところで、本作品の典拠については、既に、吉田精一「井伏鱒二と漂流記物」^(注1)において、右の三書の他にさらに次の三書が、依拠記録類として指摘されている。

- (4) 「漂客談奇」(石井研堂編『統帝國文庫 漂流奇談全集』所収)
- (5) 「漂流万次郎帰朝談」(石井研堂編『異国漂流奇譚集』所収)
- (6) 中浜東一郎著『中浜万次郎伝』

右のうち、(4)は、井伏の注記の中で、(1)の『ゴールド・ラッシュ』の引用史料として、触れられているものである。井伏の記しているのは、同史料を収録した『漂流奇談全集』の書名の方のみであり、また、井伏自身も同書に依ったとは言っていないのだが、吉田論文では、万次郎の漂流記録である、同書所収の「漂客談奇」は、当然参考されているものと見なされているようである。

以上の六書のうち、(3)の『カリホルニヤ開化秘史』は、万次郎も通訳官として

加えられた、万延元年の日米条約批准書交換遣米使節団を、米国人の青い眼がどのように捉えたか、当時の米國新聞の記事を、幽川著の同書に収録のものによって示す——という形で利用されたもの。作者自身、出典の明示の上に引用し、部分的な利用であることは明らかなので、特に問題はないと思われる。問題は、万次郎の生涯の記述に当って井伏が主典拠として用いたものは何か、また、従来指摘されてきている万次郎関係の諸史料と井伏作品との実際的な関わりはどのようなものか、という点である。

吉田論文は、指摘した史料と井伏作品を具体的に一々突き合わせ考証したものであるのだが、ここでは、(6)の中浜東一郎著『中浜万次郎伝』が井伏作品の主典拠であり、石井研堂関係の万次郎に関する諸史料、(2)、(4)、(5)は、部分的にはそのまま利用された箇所もあるが、もっぱら必要に応じて参考された程度のもので、と判断されているようである。しかし、これには大いに疑問がある。^(注2)

結論を言えば、私は、この中浜東一郎著『中浜万次郎伝』は、井伏作品の主典拠でないばかりか、井伏自身、これを参考してはいないであろうと考える。なぜならば、「序」において人事実に即した²と明言されているにもかかわらず、井伏作品には、『中浜万次郎伝』中の人事実³とは食い違った箇所が少なくないからである。

『中浜万次郎伝』は、昭和十一年四月、富山房より刊行されたもので、著者の中浜東一郎は万次郎の長男に当る。本書は、本文だけでも四八八ページ、緒言・年譜・補遺等を入れると五百数ページにも及ぶ大著である。内容上の特色としては、既に吉田精一氏の論でも指摘されている通り、海外での漂泊生活よりも帰国後の生活、特に官吏に登用され出世してからの閩歴の方に、記述の紙数が多く充てられていることが挙げられる。これは万次郎の生涯の記述全体の、ほぼ三分の二の量に達する。開国から維新へと動いてゆく國家の大情勢に多大の貢献をした人物として万次郎の足跡を描く、そうしたところに、本書の主眼があると見える。とは言え、本書は、近親者の立場から故人の遺徳をことさらに喧伝する、世にありがちの伝記の類いではない。万次郎本人からの直話や関係者の証言

のほか、漂泊時代の史料として救助船の航海日誌・書簡・米国の新聞記事等の英文史料を、さらに帰国後の史料として琉球国・江戸幕府・長崎奉行所・薩摩藩・土佐藩等の公機関の調書・報告書の類を、客観資料として多数掲げ、それらを踏まえつつ、詳細かつ実証的な記述がなされている。万次郎に関する史実を最も詳しく正確に知る上で、本書は、昭和十二年の当時、随一のものであったと言つてよい。

「記録文学叢書」の一冊として井伏がジョン万次郎について書こうとした時、史実尊重の方針からゆけば、本書は、当然、井伏にとって最も信頼の置ける人事実Vの入手源たりえた筈である。ところが、井伏の『ジョン万次郎漂流記』中の△事実Vの相当数は、後に見るように明らかに『中浜万次郎伝』中のそれとは食い違いを見せており、それらの殆どは井伏の虚構とはとうてい考えられない。とすれば、井伏は同書に触れていない、と考えるのが筋道であろう。

吉田論文では、『中浜万次郎伝』(以下、『万次郎伝』と略称する。)を典拠とする根拠は、二つ挙げられている。一つは、井伏の『ジョン万次郎漂流記』(以下、『漂流記』と略称する。)には、異国船に救助されるくだりで、他の者が怖気づいて躊躇している時、万次郎一人が手早く脱衣し、まっ先に海中に飛び入るといふ挿話のあることである。『万次郎伝』には、この挿話は父万次郎からの直話として紹介してあり、吉田氏はこの挿話は他書にはないものと見ている。確かに、この挿話は、万次郎らの帰国直後の口書の類、例えば、吉田氏の挙げている「漂客談奇」や「漂流万次郎帰朝談」等には、見当たらない。しかし、(2)の石井研堂著『中浜万次郎』には『万次郎伝』と同内容の記述がある。この挿話の存在を根拠に、『万次郎伝』と井伏作品とのつながりを直ちに結論するわけにはゆかないのである。同じことは、もう一つの根拠とされている、万次郎らの身柄取扱いに関する薩摩藩からの幕府宛の届書の引用についても言える。同届書は、研堂の『中浜万次郎』においても、見ることができるのである。

このように見てくると、『万次郎伝』を典拠とする根拠が稀薄になってくるとともに、研堂の『中浜万次郎』との関係の方が重大になってくる。

『中浜万次郎』は、明治三十三年五月、博文館から『少年読本』第二十三編として刊行されたものである。この同じ年の同じ月には、やはり博文館から、(4)として挙げた『続帝國文庫』の『漂流奇談全集』も刊行されているから、石井研堂は、一般向けと少年向けと、二冊の漂流記を同時に刊行していることになる。この『中浜万次郎』の刊行された明治三十三年は、押川春浪の海洋冒険小説『海底

軍艦』が刊行され、当代の少年読者を熱狂させた年に当る。同書は、内容的には多分に荒唐無稽な冒険譚であるが、巻頭には、現役の大軍軍大將らの序が麗々しく掲げられ、将来の海国日本の国民たる読者をして開国進取の精神の所有者たらしむに有益な書物たるべしと、力説されている。このことに象徴されるように、時代は、日清戦勝から日露戦争へと突き進む明治の国際情勢を背景に、一般庶民の間に海国日本の海外雄飛のロマンティズムが、盛んに醸成されつつあった時期である。研堂の『中浜万次郎』の主たるねらいは、「小序」によれば、万次郎という人物を、△天性進取の気象に富みて、大胆斗の如く、当時の日本国民よりは、大に進歩せる頭脳を有したる▽△漂流者中の華ともいふべき▽者、と見、△其奇談△其豪胆▽により△少年を益する▽というところにある。本書も、大筋においては、明治三十年代始めの右のような世情に呼応して執筆されることになった、少年向けの海洋冒険譚の一冊と見てよいようである。

吉田論文においても、井伏の注記に従って、依拠史料の一つとして石井研堂の本書名は、挙げられている。ところが、本書については、どういふわけか、『万次郎伝』の紹介のついでに補足的に言及されただけに留まり、その意義については関心が全く払われていない。△本書の内容もまた研堂翁の著「中浜万次郎」その他によるものである▽という井伏の注記とともに、研堂の『中浜万次郎』の意義は、結局看過されてしまっている。しかし、私見によれば、実は、研堂著の本書こそ井伏作品の典拠である。

伴俊彦「井伏さんから聞いたこと その二」^{注1}によれば、『ジョン万次郎漂流記』執筆時の事情について、井伏は、△たしか夏の頃だった。小説の材料が無いので、散歩していて、平野嶺夫に会ったら、彼が木村毅から借りていたジョン万次郎の記録二冊をまた貸してくれた。この記録を並べてみただけ▽云々、と回顧している。△夏の頃▽とは恐らく刊行年の昭和十二年の夏のことである。とすれば、この回顧は執筆時から二十数年後のものということになる。△万次郎の記録二冊▽という言葉は、井伏の記憶違いの可能性もあって、そのまま鵜呑みにするわけにはゆかないのだが、もし、この言葉通りに、木村毅からのまた借りの△万次郎の記録二冊▽によって執筆されたとする、その△二冊▽というのは、研堂の『中浜万次郎』と、同じ研堂編の『漂流奇談全集』か、もしくは木村毅の『ゴルド・ラッシュ』か、いずれかであろうと考えられる。因みに、石井研堂も木村毅も、大正十三年結成の明治文化研究会に参加、同会の『明治文化全集』(昭和二年発刊)の編集に携わっている。木村の手許から研堂の著書が借り出さ

れていった可能性は、十二分に存するのである。

それはともかくとして、次節では、井伏本人によって明らかにされながら、従来、典拠としては無視されてきた『中浜万次郎』が、間違いなく井伏作品の主要典拠であることを、それが中浜東一郎著『中浜万次郎伝』とは無関係であると考えらるる根拠をも挙げつつ、検証してゆきたい。

二

先に述べたように、井伏の『漂流記』と『万次郎伝』の間には、事実関係の上での食い違いがかなりある。そして、『万次郎伝』と食い違った井伏作品での記述は、研堂の『中浜万次郎』(以下、『万次郎』と略称する。)の記述に、概ね合致する。以下、その例を挙げることにする。

登場人物について

(1) 万次郎と共に漂流生活を送った漁師仲間の伝蔵・重助・五右衛門の三人は、井伏作品では、伝蔵・重助の両名が兄弟で、五右衛門は伝蔵の伴とされている。しかし、『万次郎伝』の本文中の記述、及び同書に収録された公的な調査・報告書の類の記述によれば、すべて、三人は兄弟とされている。石井研堂編書に収録の「漂客談奇」^(注1)「漂流万次郎帰朝談」の記述においても同様である。ただし、どういうわけか、同じ研堂著の『中浜万次郎』では伝蔵・五右衛門は父子となっており、井伏の記述は、これに合致している。また、漂流時の五名の年令は、井伏作品と研堂の『万次郎』ではともに、各々、伝蔵Ⅱ三十八歳・重助Ⅱ二十五歳・寅右衛門Ⅱ二十七歳・五右衛門Ⅱ十五歳・万次郎Ⅱ十五歳となっている。しかし、『万次郎伝』では、寅右衛門と五右衛門の年令は各々一歳ずつ食い違っており、二十六歳と十六歳になっている。「漂客談奇」と「漂流万次郎帰朝談」の年令の記述も、井伏作品のそれとは完全には一致しない。

(2) 漂流事件の発端で、万次郎ら五人が漁のために乗り込んだ漁船の船主は、『万次郎伝』によれば「宇佐浦徳右衛門」であるが、井伏は、研堂の『万次郎』と同様に、「宇佐浦徳之丞」と記述している。なお、「漂流万次郎帰朝談」には船主の記述はなく、「漂客談奇」では、△伝蔵所持の船Ⅴと記されている。

(3) 万次郎ら五人を無人島から救助した米国捕鯨船々長ホイットフィールドの家庭について、井伏作品では、△船長の宅には男の子一人、姉一人、下男一人、都合四人の世帯で他に臨時雇ひの作男がゐる。主婦は船長の留守中に病気で逝くことになったといふことである。Ⅴと書かれている。これは、『万次郎』の記述と完全に「

致している。対して、『万次郎伝』によると、船長が万次郎を伴って帰国した時、船長の妻は前回の捕鯨航海中に既に亡くなっており、彼には、ニューヨーク在住の兄以外には家族はなかったという。特に、亡妻の死亡年月日については、墓碑銘により、一八三七年五月三十一日であることが確認され、これは万次郎らの救助が行われた航海の、ひとつ前の航海中のことで、従来の諸記録の記述の誤りが指摘されている。井伏は、従来の誤まった説に従っていることとなる。一方、「漂客談奇」では、船長の家族は妻をも入れて五人で、妻は健在となっており、また、「漂流万次郎帰朝談」には、この件に関する記述はない。

(4) 米国に渡った万次郎がフェアヘブンで関わった米国人達について見ると、井伏の『漂流記』では、万次郎は「桶屋のジェムス・アレン」の家に寄寓し、さらに、その娘の「ジェーン・アレン」の経営する私立学校に入学したと書かれている。しかし、『万次郎伝』によれば、万次郎の寄寓先は、船長の友人の「デュームズ・エーキン」の宅であり、私立学校経営者の「ジェーン・アレン」は「デュームズ・エーキン」の隣家の三人姉妹中の一人である。彼らは父娘ではない。また、「エーキン」は桶屋ではなく、万次郎が桶屋と関わりを持つのは、後にホイットフィールド船長が再び捕鯨航海に出、その留守中に「桶屋のハジ」なる人物の下で、住み込み丁稚となって樽造りを習う、という形においてである。つまり、井伏作品の記述には、「エーキン」と「桶屋のハジ」との混同、及び「エーキン」と女教師「アレン」との関係の誤認があるわけである。こうした井伏作品の記述も、研堂の「漂流万次郎帰朝談」には、この間の経緯については、△チヒタという師に就き、学ぶこと六ヶ月程Ⅴという記述が見られるが、「漂客談奇」には、船長宅より学校に通った事が記されているのみである。

経歴等について

万次郎の経歴には、大筋において食い違いは見られない。しかし、万次郎ら漂流民たちの行動や体験の細部を見てゆくと、相当数の食い違いがあり、その枚挙にはいとまがない。ここでは、漂流から米国捕鯨船の救助までの記述中の食い違いを、幾つか挙げてみることにする。

(1) 無人島に漂着した五人の上陸の仕方について、井伏は、まず、寅右衛門と五右衛門の両名が船から岩角に跳び移り、万次郎は残りの伝蔵と重助と共に跳び移ろうとして失敗、海面に投げ出されたとしている。これは、『万次郎』でも同様である。が、『万次郎伝』によれば、万次郎は、寅右衛門と五右衛門の両名と共に先に海中に跳び込み、岸に泳ぎ着いた事になっている。「漂客談奇」

「漂流万次郎帰朝談」には、こうした細かな記述はない。

(2) 無人島生活のある日、万次郎は、島の高い岩山で、彼ら以前の漂流者のものと見られる墓石と濁り水の溜まった井戸を発見しているが、『万次郎伝』によれば、この時の発見者は伝蔵と万次郎の二人である。対して、井伏作品では、伝蔵はこれより先に大怪我をして岩屋に引き籠っており、身心の頑健な万次郎が一人で発見し、岩屋に戻って報告したことになる。この井伏の記述は、研堂の『万次郎』のそれと全く同じものである。他の二書にはこの記述は見当らない。

(3) 米国捕鯨船による救助の経緯について、『万次郎伝』は、六月頃、新月から二日後の朝に、一隻の帆船が島に接近したものの、方角を変えて走り去り、午後になって再び接近して漂流民達を発見、救助に至った、という風に記している。が、井伏及び研堂は、朝に来島した際に、島から遠ざかりかけて、万次郎ら三人の必死の哀願に気付き直ちに接近、無事救助した、としている。さらにまた、『万次郎』は、この救助の際、岩屋に残っていた伝蔵と重助が異人に介助されて磯辺に出て来た時、万次郎と五右衛門は先に本船へ移され、寅右衛門のみが待機していたこと、また、足を負傷して歩行困難の重助が非常の力を發揮して自力で船に泳ぎ着いたこと、を伝えている。しかし、井伏と研堂の作品では、待機していたのは万次郎ら三人であり、重助は黒人船員に抱かれて船に助け上げられた、としている。他の二書には、こうした点についての言及はない。

年代月日について

年代月日の異同に関しては、次の四通りの異同例を見ることが出来る。

(ア) 井伏『漂流記』・研堂『万次郎』と、中浜東一郎『万次郎伝』との間に食い違いのある例。

(イ) 『漂流記』と、『万次郎』・『万次郎伝』との間に食い違いのある例。

(ロ) 『漂流記』・『万次郎伝』と、『万次郎』との間に食い違いのある例。

(ハ) 『漂流記』、『万次郎』、『万次郎伝』の三者間に食い違いのある例。

右の四通りの異同例のうち、(ア)の例は、これまで挙げてきた例と同様に、井伏の『漂流記』の典拠が、『万次郎』であることを根拠づける例であるが、(ロ)の例は、逆に、『万次郎』ではなく『万次郎伝』であることを、また、(イ)、(ハ)の例は、『万次郎』でもないことを、それぞれ示しているのではないかと考えられる。(ア)の例のあることは、これまでの考察からは当然のこととして、これら(イ)、(ロ)のような例も出てくるのは、どのように考えたらよいのだろうか。

まず、(ロ)の例であるが、これは、ハワイに残留した伝蔵と五右衛門が、米国捕鯨船「ロロレド号」によって日本への帰還を企図したものの果たしえず、再びハワイに帰航する、というくだりのもので、伝蔵らに乗せた「ロロレド号」のホノルル出港時期は、井伏作品と『万次郎伝』では共に一八四六年（弘化三年）の十一月下旬とされているが、研堂の『万次郎』では同年の十月下旬とされている。これらだけから判断すると、先にも述べたように、井伏は『万次郎伝』に拠っているように考えられる。しかし、実際にはその可能性はごく小さいようである。(ロ)の例がこの例一つであることがその理由の一つ。そして、井伏作品中の「ロロレド号」の出港時期についての記述に、不統一の見られることが、もう一つである。すなわち、井伏作品中、十一月下旬出港とあるのは、日本帰還を果たさずハワイに戻った伝蔵の、万次郎への談話中の記述の方であって、同じ件について、ハワイに居残った寅右衛門が万次郎に語ったところでは、十月下旬となっている。井伏の主典拠と考えられる『中浜万次郎』では、伝蔵と寅右衛門のそれぞれの談話で共に十月下旬出港となっており、そうした不統一はない。また、『万次郎伝』では、このように両人の談話を通して伝蔵らの帰国の試みを叙することは、行われていない。とすれば、この例の場合も、『万次郎』の記述（十月下旬）に依拠した可能性は残されているわけである。井伏の、伝蔵談話中の十一月下旬という記述は、単なる誤植でないとすれば、これは必ずしも『万次郎伝』に由来するものではなく、もっぱら『万次郎』に拠って記述してゆくうちに、たまたま生じた作者自身の錯誤か、もしくは、この伝蔵談話の部分についてのみ『万次郎』以外の資料が参照されたために生じた意図的なものか、いずれかではないかと思われる。なお、「漂流万次郎帰朝談」にはこの件の明記はないが、「漂客談奇」では十月下旬となっている。

次に(イ)の例だが、これには三つある。

(1) ホイットフィールド船長に連れられて米国本土に渡った万次郎のホノルル再訪の年月について、『中浜万次郎』と『万次郎伝』は、一八四七年十月と記している。対して、井伏作品は、同年の十一月であるとする。「漂客談奇」では十月となっている。

(2) 日本への帰国達成後の、万次郎ら三名の日程に関して、薩摩藩の指示による鹿児島上陸日時を、『万次郎』、『万次郎伝』は共に嘉永四年（一八五一年）八月一日とし、『漂流記』は同年七月三十日とする。井伏の記述は『万次郎』のものと同じのずれがあるわけだが、しかし、記述の内実を検討してみると、井伏は『

『万次郎』の記述を勘案して敢えて三十日としたのではないかと考えられる。『万次郎』によると、彼らは、七月二十九日に薩州山川港着、翌晦日に二船に分乗、八月朔日未明に着岸、鹿児島城下上陸、となつてゐる。それが井伏作品では、二十九日に山川港沖投錨、翌三十日未明に二船に分乗、鹿児島城下上陸となつており、二船に分乗後直ちに上陸が行われたかのように記述されている。『万次郎』での二船への分乗から鹿児島上陸までの間の一日の空白を埋めた形である。しかし、山川港と鹿児島との間は十二、三里の行程であること（『万次郎伝』による）、井伏も書いているように、漂流のこうした護送は藩の機密保持のために夜闇をぬって行われたこと、これらを考慮すると、井伏作品の記述は実情にそぐわない。『万次郎』での一見空白に見える一日（ただし、二船への分乗の時刻が不明なので、この一日がどれほどのものかは分らないが）は、実はそれなりに意味があるのである。井伏は、この山川港と鹿児島間の行程に気付かず、『万次郎』の記述を改めたのではないか。なお『万次郎伝』によれば、山川港着は七月晦日、鹿児島上陸は八月一日夜で、『漂流記』とはむしろのこと、『万次郎』の記述とも半日以上はずれが、実際にはある。先の推測が成り立つとすれば、ここでの例は、数字に現われた異同とは裏腹に、むしろ、『漂流記』と『万次郎』とのつながりを示すことになる。「漂客談奇」には、七月三十日夕刻を鹿児島上陸時としてある。井伏が一日繰り上げて七月三十日を上陸時とした背景には、あるいは、この記述が積極的に作用したということがあるのだろうか。

(3) 同じく、日本帰国後の万次郎ら三名の日程について、長崎奉行所での絵踏みの取調べ月日を、『中浜万次郎』、『万次郎伝』は共に嘉永四年十一月二十二日とし、井伏作品は同年十一月二十一日と記している。他の二資料にはこの件の記述はない。

(4) の例は米国捕鯨船による万次郎らの救助月日の記述だけで、これを、井伏『万次郎漂流記』では、万次郎らの遭難した同年（天保十二年）の六月七、八日頃としている。が、『中浜万次郎』では、同年の八月六日の三日月を望みて二三日目Vという風に叙し、さらに、救助後の捕鯨船の離島を翌五日のこととしている。つまり六月四日の救助ということになる。（井伏作品では、離島は翌日八、(九)日としている。）一方、『万次郎伝』を見ると、まず、万次郎ら漂流民の立場からの叙述の箇所では、八月六日も覚しき頃、新月の後二日ばかりを経たるV日とし、後に、それが実際には天保十二年五月九日（一八四一年六月二十七日）であったことを、捕鯨船側の航海日誌によって考証している。なお、「漂客談

奇」では六月四日頃、「漂流万次郎帰朝談」では五月三、四日頃とあり、『中浜万次郎』は「漂客談奇」と一致している。

以上のように(4)、(5)、(6)の例を見比べると、年月日の記述の面においても、井伏が『万次郎伝』を参照していないことは、ほぼ確定してよいと思われる。ただし、(4)、(5)、(6)の例の井伏作品と研堂の『中浜万次郎』との食い違いは、依然として問題であろう。これまでの例や次に挙げる(7)の例から考えると、井伏作品が『中浜万次郎』に依拠していることは間違いないが、しかし、これらの食い違いが、誤植や作者の単なる錯誤によるものでないとするれば、井伏は必ずしも『中浜万次郎』のみに全面的に依拠しているわけではなく、他の何らかの資料をも参照していると考えざるをえないようである。

井伏作品と『中浜万次郎』の記述が合致する(7)の例を最後に挙げておく。これは二つある。

(1) 万次郎らが海上で遭難し漂流の末、無人島に漂着するのは、『漂流記』と『万次郎』によれば、出漁の日（天保十二年正月五日）から八日目の正月十二日の夕刻で、決死の覚悟での上陸の試みが成るのは翌日十三日である。が、『万次郎伝』では、同年正月十三日の正午頃島を発見、翌日十四日早朝上陸とあり、一日のずれがある。「漂客談奇」では同年正月十三日朝四ツ時頃島の発見、同日夕七ツ時頃上陸、また、「帰朝談」では同年同月十三日四ツ時頃上陸となっている。

(2) 日本帰還を企図した万次郎ら三名が、米国商船「サラボーイド号」でホノルルを出発するのは、『漂流記』では一八五〇年十月二十五日、『万次郎』と「漂客談奇」では同じく十月二十五、六日頃であるが、『万次郎伝』では同年十二月十七日（嘉永三年十一月十四日）としてある。この『万次郎伝』の年月日は、万次郎らの帰国に際してホノルル駐在の米国領事から下附された彼らの身分証明書（一八五〇年十二月十三日付）、米国人牧師がホノルルの新聞「ポリネシアン」紙に出した、万次郎らに対する物品の援助者を募った広告文（同年十二月十四日刊）等の、米国側の英文資料によって考証したものである。『万次郎』および『漂流記』には、右の広告文は既に引用されているのだが、十二月十四日付の「ポリネシアン」紙に掲載されたものとしてある。したがって、両書において、実は、この広告文の引用と十月二十五（六）日ホノルル出港という記述との間に明らかな矛盾がある。（ついでに言うと、井伏作品中には、もう一つ、商船「サラボーイド号」のホノルル入港を同年の十一月月上旬とする矛盾もある。）『万次郎伝』の十二月十七日出港説は、こうした矛盾を解消したものである。

井伏作品の典拠が、中浜東一郎の『中浜万次郎伝』ではなく、石井研堂の『中浜万次郎』であると考えられる根拠は、その他、人名や地名等、固有名詞の表記法の異同にも見い出せるが、何よりも明白なのは、引用文献の違いであろう。

井伏作品中に、河村幽川の『カリホルニヤ開化秘史』からの抜萃と断わられたもの以外で、引用されているのは、次の六文献である。

- (1) 一八五〇年十二月十四日付「ポリネシアン新聞」掲載の義捐金募集広告文
- (2) 薩摩藩から幕府への漂流民帰還の届書（嘉永四年九月十一日付）
- (3) 長崎奉行所での取調べによる「漂流民口書」
- (4) 長崎奉行より土佐高知藩へ宛てた漂流民引渡しの通告書（嘉永四年十月付）
- (5) 長崎奉行より万次郎ら漂流民に宛てた申渡状
- (6) バッテイヤ艇製造に関する、老中阿部伊勢守の大船製造係宛書状

右の六文献は、研堂の『万次郎』中にはすべて引用されている。しかし、『万次郎伝』には、(3)は見当らない。万次郎らが米国より持ち帰った物品の詳細な取調書は収録されているのだが、井伏が引用している、米国の国情に関する談話類は欠けている。さらに、(1)についても、『万次郎伝』では、「ポリネシアン」紙掲載の英文原文と、筆者自身のもと思われる邦訳文とを対照してあり、文体から一見して明らかに、井伏の引用文は、『万次郎』からのものである。広告文の一字一句まで完全に一致しているわけではないのだが、英文原文に即した『万次郎伝』の邦訳文に対して、井伏のものは、どちらかと言えば意識的な文体であった、これは研堂のそれと全く同じなのである。ただし、内容の上では、井伏作品の広告文中、万次郎らの米国捕鯨船に救助された年を「一八四〇年」としてあるのは、研堂の広告文中では「一八四一年」となっている。『万次郎伝』でも同様であり、事実は「一八四一年」である。この食い違いが気になるが、井伏は、万次郎の土佐中の浜への帰郷を、『万次郎』と同様に、郷里を離れてから十二年目、嘉永五年十月五日（一八五二年十一月十六日に当る。）のこととしている。研堂の「一八四一年」説でゆくと、この十二年目、というのは足かけ十二年の意である。推測の仕方としては少々単純すぎる気もするのだが、井伏は、それを、九十二年目と解し、広告文掲載の年の一八五〇年から逆算して、原文の「一八四一年」の年のずれを改めたのではあるまいか。前節の年月日の異同の所で述べたように、『万次郎』以外の資料も参照された可能性があるので、あるいは、別資料を根拠として改められたとも考えうる。（作者の錯誤・依拠テキストの誤植等

も、むろん考えうる。）いずれにせよ、数字や字句の細部の食い違いから、井伏作品と『万次郎』の間の落差の処理の問題が、ここでも浮かび上がってくるが、『万次郎伝』と『万次郎』の対比から判断する限りは、井伏が『万次郎』に負うていると見なして、まず間違いはない。

以上、『万次郎伝』を主典拠と見る従来の説が却けられ、研堂の『万次郎』とのつながりが明らかになったところで、終りに、井伏の『漂流記』が研堂の『万次郎』に具体的にどれほど依拠して叙述されているか、その一端を、両者の対照によって見ておきたい。次の例は、万次郎ら五名が無人島に漂着した直後の状況を叙した箇所、(A)は井伏の、(B)は研堂の、叙述である。

(A) この島は周囲一里ばかりと思はれる無人島であつた。突元たる磐石が争つてそそり立ち、草木といつてはわづかに芽が生えてゐるだけで、地獄絵に見る剣の山といふのはこれを見て創案したのではないかとさへ思はれた。漂着した五人のものは先づ飲料水を見つげるため、それぞれ手分けして岩間の清水をさがしまはつた。すると磯を見おろす岩根のかたはらに、二間四方もある岩窟が見つかつた。その入口には貝殻がいつぱい散らばつて、かつて人の生棲した跡ではないかとも思はれた。岩窟のなかには朽ちた一本の丸太が恰も枕をして寝てゐるやうに、枕の型をした石を枕にしてころがつてゐた。五人のものはとりあへずこの岩屋のなかを掃除して、ここを当座の棲み家とすることにした。彼らは再び手分けしてそこかしこをさがしまわつた挙句、漸く岩の窪みに溜つてゐる雨水を見つけた。彼等にとつてはその水溜りが唯一無二の井戸にはかならなかつた。彼等は唇をその水溜りに押しあてて喉をうるほした。

(B) さて、此島といふは周囲一里に過ぎざる突元たる巖礁の孤島にして、嶮岫たる巖石争ひ起り、剣の山といふものゝ如し。近年我国の領属たることを明にせし、鳥島ならんかといふ。一同は、先づ水を得んとして、手を分けてこゝかしこに攀ぢ登り、人家をさがしたれども、小屋一つのみ影だになく、唯僅に小さき茅簾などの、さびしげに自生するのみなり。さては無人島なるかと、尚ほ東岸の方を探りに、磯岸に、二間四方内外の巖窟あり、其中をのそき見けるに、曾て人の棲みしと思はるゝ痕跡もありたれば、これ屈究の棲み場所なりと、何れもこゝに居を定め、飲料水を索め歩みに、とある巖石の凹める面に、僅かばかり雨水の溜りありけるを得たれば、顔を石面に当て、喉を湿しぬ。

口語体と文語体の違いはあるが、(A)、(B)の叙述内容・順序には殆ど相違が見られない。読者には、井伏は研堂の文語体による叙述を下敷にしながら、自作の叙述を進めているように見える。むろん、両者は全くの同一内容というわけではない。(A)には、岩窟の入口に貝殻が散乱していたこと、その中に丸太が一本寝転がっていたこと、五人がそこを直ちに掃除したこと、この三つの事実が書き込まれているが、原文の(B)にはそれがない。また、無人島が鳥島であったことは(A)では明かされていない。しかし、(A)で書き込まれた右の三つの事実は、(B)には全くなかった新しい事実というわけではなさそうである。(B)には既に、岩窟の中を見ると人間の棲んだ痕跡があり、漂流民たちは恰好の棲み家と見て居を定めた、とあり、こうした記述から状況をもう少し具体的に描いてゆけば、(A)のように、貝殻や丸太や掃除の件はかなり自然に出てきそうだからである。井伏は、(B)の記述中に内在していた事実を、作家の筆で顕在化したにすぎないとも言える。ただし、丸太が石を枕にして寝転がっていたと書かれているあたりには、もっぱら状況の悲壮さばかりが強調されている原文には全くない、とぼけたおかしみがあって、こうしたユーモラスな視点は、井伏が新たに付加したものと認めておかねばならないだろう。

このように、細部の取捨選択・場面の膨らませはあるものの、叙述展開の大筋の所では、井伏は典拠の叙述展開に従っていると云ってよい。のみならず、この例では、研堂の原文中の△突兀たる▽△(巖石)争ひ起り▽△剣の山▽といった、孤島の偉容を写した語句までが、ほぼそのままの形で取り込まれている点にも、注目すべきであろう。

『万次郎』での研堂の文章は、先の例からも窺えるが、漢文的な修辭句を多く取り入れた文語体で、場面が盛り上ってくと一種の美文調の文体になってくる。こうした文体は、通例、描かれる対象をそれ自体として自立的に浮かび上らせるよりも、描く主体の観念や情緒を表出する傾向の方が強い。つまり、描かれる事物が主題に色づけされ易い。その上また、研堂の文章中には、作者自身の主観の表白箇所も目立つ。例えば、漂流民たちが苦境に陥ったりすると、△哀なり▽とか△浅まし▽とかいった、作者自身の詠嘆を表白する言葉が、しばしば吐かれるのである。全体として、『万次郎』の文体は、観念性・情緒性の濃い文体であると言える。

井伏は、研堂の叙述展開をかなり忠実に辿ってはいるが、彼の頻用する美文調・悲憤慷慨調の大仰な修飾語句を意識的に切り捨て、研堂の観念的・情緒的文体は一貫して排除している。しかし、右の例が示しているように、原文の修辭的な

語句を悉く切り捨ててはいるわけではない。典拠中に書かれた事実(情景・人物・状況)を、作者の情緒的な色づけを払拭し客観的に鮮明に描くところで、時には逆に原文中の語句を抜き出し、井伏自身の口語体の簡素な文章中に組み込むということをしている。結果、古風な、場合によっては大仰で陳腐になりかねない語句が、井伏の文章に入ると、却って淡々とした硬質な文体を形造る要素になるということが起こる。因みに、右は地の文での例であるが、会話文に原文中の語句を利用した例も多く、中には一文をそのまま用いた箇所もある。例えば、ホノルル残留の伝蔵父子を訪ねたホイットフィールド船長が、伝蔵の住居の余りの貧相さに呆れながら、△さてさて風流の住び住居ひかな。▽と言って屈託なげにうち笑うくだりがそれである。この場面での、飄逸味のあるこの言葉は、大らかで快活な、しかも異国の漂流民たちへの思いやりにも欠けるところのない船長の心情を、さり気なく、確かに表現していて、印象的である。読者には、これはまぎれもなく井伏的世界の好人物と受け取られるのだが、実は、このあたりの事実関係・船長の言葉は、すべて研堂の原文そのままなのである。井伏は、典拠中の事実と表現の一部をそのまま生かしながら、自身の文体により、一場面を構成しているのである。

ここに挙げた例は、典拠との相違が比較的少ない例である。作品全体を対照して見てゆくと、相違の大きく目立つ箇所の方が実際には多い。しかし、その相違は、典拠の叙述内容の取捨選択・拡大縮小、あるいは新たな内容の付加によって生じたものであって、井伏作品の、研堂作品への依拠関係を些かでも疑わせるものではない。右の例から窺われるように、井伏作品は、万次郎らに関する事実、その事実を叙する順序、また、部分的にはその叙述の際の用語、これらの面においてそれぞれ、終始、研堂の『万次郎』に大きく負っているのである。

四

以上、典拠が確定したところで、当然、次に問題となってくるのは、両作品の内実である。井伏は、研堂の『中浜万次郎』に依拠しながら、新たな万次郎漂流記として、ここいどのようなものを創り出しているのか。今度は、両作品の相違点の方に注目して、井伏作品の内実を探ってゆかねばならないわけであるが、典拠確定作業に手間取り、もはやその余裕を失った。その問題の検討は後の稿に譲ることにして、最後に、これまで井伏作品との関連の有無に言及しえなかつた、他の資料についての気付きを述べ、本稿の締めくくりとしたい。

『万次郎伝』と研堂の『万次郎』以外の資料で、従来、万次郎関係の依拠資料として指摘されてきたのは、同じ石井研堂の編になる漂流記録集所収の「漂客談奇」と「漂流万次郎帰朝談」である。前者は、嘉永四年十一月の長崎奉行所における取調べの口書であり、後者は、翌五年の土佐高知藩での、やはり口書である。結論を先に言うと、この二書は、これらがなければ井伏作品は書かれえなかったというような資料ではなく、実質的には井伏作品とは関わりはないと言つてよさそうである。

既に主典拠が確定したまま、仮にこれらの二書が井伏作品に資するところがあつたとすれば、主典拠の欠けた部分を補う、あくまでも補助的な資料としてである。「二」で、井伏作品・研堂の『万次郎』・中浜東一郎の『万次郎伝』の三書の異同と共に併せ見たように、これら二書の記述には、井伏作品のそれと食い違つたり、全く言及されていなかったりするところが少なくなく、とうてい主典拠たりえないからである。しかし、井伏作品中の記述で、主典拠『万次郎』にはないもの、また、主典拠の記述と食い違うもの、これらが、二書のいずれかにあるか、またはいずれかの記述と一致するか、こうした観点から二書を見ていっても、典拠と食い違う記述がわずかに一つ、「漂客談奇」中の記述との関連を疑わせるにすぎない。すなわち、前に問題となつた、万次郎らの鹿兒島上陸日時の記述がそれである。典拠に（嘉永四年）八月朔日未明とあるのに対して、井伏作品では七月三十日夜明け前、「漂客談奇」では七月晦日夕方となつており、同日である点では関連があるように思えるが、刻限のずれからすると、井伏がこれに拠つているとは断じ難い。結局、井伏が確かに二書の記述を踏まえていると言える例は皆無ということになる。

井伏作品と二書を対照して見てゆくと、内容の重なり合う箇所が多数ある。特に、記述のより詳細な「漂客談奇」には、井伏はこれに拠つたのではないかと思われる箇所が少なくない。しかし、今さら言うまでもないだろうが、このことをもって、井伏がこれらを参照しているとは断ずることはできない。なぜなら、そもそも石井研堂自身が、恐らくこれら二書を踏まえて、『中浜万次郎』を書いている筈だからである。

「漂客談奇」と「漂流万次郎帰朝談」が補助的な資料として利用されたと言えぬ確実な論拠は見当らない。実質的に井伏作品と無関係である、と言わざるをえぬ所以である。

ところで、「漂客談奇」と題する漂流記録は、右の口書の外にも、高知の学者

吉田正誓の編になる「東洋漂客談奇」^(註1)（全三巻）がある。これは、海外事情に強い関心を抱いていた学者の吉田らが、土佐に帰国したばかりの万次郎らを招いて訊き取つた談話の記録で、口書ではない。遭難から土佐帰国までの遍歴、米国の政治・風俗習慣・言語等に亘る事項が、詳細に記されている。研堂の『中浜万次郎』は、先の口書類を踏まえていることは間違いないが、依拠の度合から見ると、吉田のこの「漂客談奇」の方に、多くを負っているのではないかと思われる。記述の事実関係において合致する箇所が、口書の方よりも多く、少なからず叙述の細部まで符合するからである。例えば、先に、井伏が研堂の叙述をそのまま利用している例として挙げたホイットフィールド船長の飄逸な言葉、これは実は、本書中に既に記されているのである。研堂は、『中浜万次郎』の識語で、「漂海異聞」「漂民紀事」などの文献名を依拠資料として掲げている。それらの中には、本書の名は挙がっていない。また、私自身、研堂の挙げている資料は見及んでいないので、本書よりも『中浜万次郎』に近い資料があるのか否か、不明である。したがってあくまでも推測なのだが、研堂の『中浜万次郎』の主典拠は吉田の「漂客談奇」であると見てよいのではないかと思つている。

それはともかく、井伏は、もしかすると、従来、依拠資料として挙げられていない本書は、参照しているのかもしれない。と言つるのは、内容・叙述の面で重なる所のあるのは、本書に拠つていると推測される『中浜万次郎』が主典拠である以上当然のこととして、井伏作品での章題の付け方は、吉田の「漂客談奇」中の各談話に付された見出しの形式と、よく似ているからである。例えば、井伏作品では、「一 万次郎等五名の漁師、浪の間に間に漂ふこと」、「二 万次郎等、絶海の孤島に助け船を求めること」といった形式であるのに対し、「漂客談奇」では、「一、土佐国漁人異国漂着并帰朝之事」、「一、伝蔵等漂流ウワホーヨリ帰朝之事」となつている。『中浜万次郎』やその他の資料には、こうした形式の見出しは見られない。井伏の、こうした古風なスタイルVの章題は、本書に示唆されたものではあるまいか。なお、井伏作品中の記述で、主典拠と食い違ひ、本書中の記述とは合致するという例は見当らない。つまり、事実関係の記述に際して本書が補助的に参照された形跡はないということである。

注1、『日本文学研究資料叢書 井伏鱒二・深沢七郎』（昭52・11、有精堂）所収。初出は「解釈と鑑賞」（昭36・4・5）。

注2、浦田佑「『ジョン万次郎漂流記』——その、井伏文学に占める位置」

(『作家作品シリーズ7 井伏鱒二』昭55・5、東京書籍、所収。)を始めとして、従来の論のすべては、吉田説に従っている。

注3、以下、『中浜万次郎』からの引用・考察のテキストは、すべて『日本児童文学大系第三巻 石井研堂・押川春浪集』(昭53・11、ほるぷ出版)所収本文による。

注4、『井伏鱒二全集第三巻』「月報4」(昭39・12、筑摩書房)所収。

注5、『統帝国文庫 漂流奇談全集』(明33・5、博文館)所収。

注6、『異国漂流奇譚集』(昭2・6、福長書店)所収。ただし、本稿では同書の再版本(昭46・12、新人物往来社)所収本文による。

注7、普及版『井伏鱒二全集第二巻』(昭42・3、筑摩書房)以降の本文では、これらの矛盾を解消するために、「ポリネシアン」紙の刊行を「十一月十四日」、ホノルル港出港を「十一月二十五日」と改訂してある。しかし、これは史実には反する改訂である。

注8、『日本庶民生活史料集成第五巻 漂流』(昭43・9、三一書房)所収本文による。

注9、紅野敏郎「井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』」(『国文学』昭49・3)参照。